

第4回 語り愛、九州大谷文芸賞 講評

【講評】審査委員長 梁木靖弘

輪郭をあたえること、自分に、そして世界に。すべての文化(その中で個別に洗練されたものを芸術と呼びましょうか)は、自分の生きる世界に何らかの輪郭をあたえる行為ではないでしょうか。文化・芸術がなければ、ぼくたちは世界の全体像を想像することができないかもしれません。もちろん、世界の全体像などというものが、はたしてあるのかどうか、ぼくらにはわかりませんし、そんなものをほんとうに理解できるはずはないのです。ただ、文化・芸術という虚構(ゆがんだ鏡に映る像といってもいいかもしれません)を共有することによって、ぼくらはかろうじて世界の実感のようなものにふれることができます。それなしには、一日たりとも生きていけないのです。

世界に輪郭をあたえたいという衝動は、その全体を直感的に夢見ます。その夢にことばで輪郭をあたえたものが、文学です。偉大な作家の小説も、高校生の思いつきも、基本的には同じものです。もちろん、そこから先が違います。描かれている世界のち密さ、ことばの解像力の鮮明さ、構造のダイナミックさなど、優れた小説には、それまで誰も描かなかった(気づかなかった)世界の輪郭が示されているのです。芸術とは世界の全体を夢見ることだと、ぼくは思います。

いきなりややこしい理屈から始めてしまいましたが、みなさんの作品を読む人間が、どんなふうに小説のことを考えているのかを、知っておいていただきたいと思ったからです。

さて、本題に入ります。今年の九州大谷文芸賞には13編の応募がありました。昨年より若干増えました。ありがとうございます。しっかりと書きこんでいる作品が、例年より多かったという印象です。

そのなかでずば抜けていたのが、「螺旋球」です。高校野球をテーマとした青春ものですが、題材はそれほど珍しいわけではありませんし、展開がそれほどすぐれていたというわけでもありません。まるで野球劇画のようです。では、何がずば抜けていたのでしょうか。全文がHPにアップされていますので、ご覧いただければと思いますが、たとえば「打者のバットは華麗に半速球をすくい上げ、レフト方向に低い弾道で弾き返した。皆が歯を食い縛った時、時間が止まる。」という文章があります。これなど、野球の体感が見事に、それこそ華麗に、文章化されていると思います。野球の体感を文章にすることにかけて、この作品はずば抜けているのです。その一点で、これを第1席としました。

受賞作品

最優秀作 『螺旋球』

薄俊平 福岡県立博多青松高等学校 1年

優秀作 『夢小説』

又吉来美 沖縄県立美来工科高等学校 2年

第2席は、「夢小説」です。死んだ作家の夢日記が、新進作家に残される。彼は続きを書くように託されていた。そして、それに没頭すると、やがて、彼は発狂し始める・・・という物語です。あまり高校生が手掛けないミステリータッチのサイコホラーといった趣があり、もっと文体に凝れば、夢野久作のような小説になるかもしれません。力作ですが、展開はそれほど新鮮でなく、評価が落ちました。

入選したのはこの2作です。

そほかの作品にもふれておきましょう。

「夏とラーメンとあの日の記憶」。変えたいと願う過去を一つだけ変えられるスイッチを拾った男。スイッチを押すと、作品の冒頭で一緒にラーメンをすすっていた友人が、自動車事故で半身不随になっている。そのかわり、死んでいるはずの女性が生きている。友人たちのどちらを選ぶべきなのか。主人公は、二つの世界を行き来して、悩む。運命が変えられたら、という趣向のSF譚。こういう話は、設定がすんなりと頭に入ってこないといけないのですが、それが意外とわかりにくい。思いばかりが先行しすぎたようです。

「勇気とほんの少しの奇跡」。野球部の男子に恋心を抱かれるひとりの女の子。しかし、彼女は別の男の子に告白してしまう・・・。初恋の三角関係ですね。残念ですが、それ以上のおもしろさはありません。

「天門の下で」。記憶を失くした男が、DVDの映像を見せられる。それは彼の妻の一生であり、ふたりの人生が映し出される。末期ガンに冒され、許可された外泊二日目の朝、彼女は飛び降り自殺を図る。彼はそれに気づき、彼女を守れなかったことを悔いて、天門の向こうにいる妻に会いにゆく。これも、思いが先走って、物語の複雑な構造をきちんと描き切れていないと思います。

「私の青い春」。青春とは何かに悩む女子中学生が、目立たない男の子に恋をする。十年後、彼女は彼と再会する。これも、恋を描きたいという思いだけで突っ走り、小説として最低限必要な設定がないがしろにしています。

「星探しの旅人」。人生への疑問を書き連ねた、散文詩のような作品です。構想は大きいのですが、それに見合うだけのディテール(細部)がありません。これでは、まだメモの段階でしょう。

「笑って」。現代の女の子が、幕末の新撰組の時代にタイムスリップし、再び戻ってくるというものです。タイムスリップものは、一大ジャンルといっていいほど類似の物語がありますので、趣向や解釈がそれこそ新撰、おっと、新鮮でなければなりません。さてどうでしょうか。土方歳三愛され、ヒロイックな

別れに涙するという、いささか都合のいい話になっています。書き手の自己満足だけでは、読み手を満足させることはできません。

「いつもの日々」。これは？です。交通事故がくり返し起こり、転校生がやってきて、何か話が展開するかと思えば、何事もなく、いつもの日々がくり返される。やはり？としかいいようがありません。

「『駒』の目的と『自分』の目的」。これも？です。創作というより、私的な意見の開陳といったもので、感想をといわれても困ってしまいます。

「運命」。一通のメールに自分の死が予告されている。そして、その通りに事は進むが、死ぬ時間になってもなぜか死なない。それだけです。これも、困ります。

「奇跡？そんなもん知らん」。これもよくわかりません。生意気な幼なじみの女子との日常のやりとりが続き、交通事故に遭いそうになる彼女のかわりに、自分が犠牲になったと思ったら、そうではなかったという話。

「走る男」。陸上部でレーの選手になった男子。彼の日常をそのまま書いているだけです。

最後に、ひとことだけ苦言を呈しておきます。応募していただくのはありがたいのですが、中に学校の課題作文らしきものをそのままコピーしたものがありません。社会常識としてどうでしょうか。応募するのなら、せめて、別の原稿用紙に書き写すぐらいの気遣いはあってしかるべきではないでしょうか。たとえ見どころのある作品であっても、真っ先に落とされてしまいます。表現することは、自分のためだけではありません。見知らぬ他者に届いてこそ、はじめて表現となるのですから。